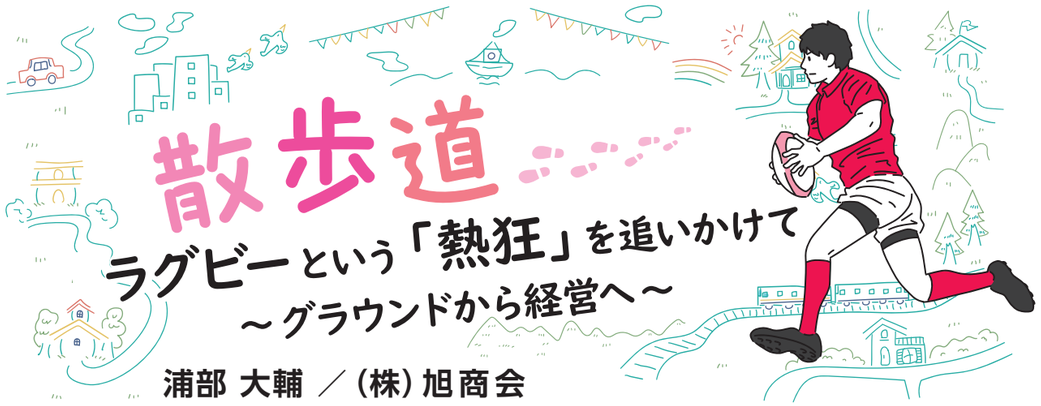

散歩道

ラグビーという「熱狂」を追いかけて ～グラウンドから経営へ～

浦部 大輔 ／（株）旭商会

2019年、あの熱狂が教えてくれたこと

週末のスタジアム。緑の芝生を囲むように、大観衆がひしめき合っています。ひとつのパス、命がけのタックル、そして泥臭くインゴールに飛び込むトライ。その一瞬一瞬に、スタジアム全体が地鳴りのような歓声に揺れ、見ず知らずの隣の人と肩を組んで一喜一憂する。あの鳥肌が立つような空気感は、他では絶対に味わえない特別なものです。私の現在の趣味は、ラグビーを観戦することです。ラグビーのシーズンが始まれば、毎週末のようにテレビの前で、あるいはスタジアムで、熱い戦いに視線を注いでいます。国内リーグの白熱した試合を追いかけるのはもちろんですが、やはり 4 年に一度の「ワールドカップ」となると、日常のすべてを忘れてしまうほど、まったく異なる熱狂に包まれます。私は、高校から社会人まで 15 年間ラグビーをしてきました。現役を引退した直後は、ラグビーを観戦することに、それほど興味が持てませんでした。自分がプレーする側だったからこそ、どこか冷めた目で見てしまう部分があったのかもしれません。そんな私の心をもう一度、ラグビーの虜にさせたのが、2019 年に日本で開催されたワールドカップでした。日本中が ONE TEAM となり、スタジアム全体がひとつの生き物のように感情を共有している光景を目にしたとき、私は「ラグビーを観るのって、こんなに楽しいことだったのか」と、言葉にできない感動を覚えたのです。それ以来、私の週末はラグビー観戦という最高の趣味で満たされるようになりました。

「なんとなく」から始まった、泥臭くも濃密な競技人生

いまや観戦にここまで熱を上げている私ですが、ラグビーとの出会いは、決して誇れるものではありません。何か新しいことでも始めてみようという、本当にささやかな興味本位からラグビー部への入部を決めたのです。特別な憧れや強い意志があったわけではありません。しかし、進学した高校は、全国大会の常連と呼ばれ、目標「日本一」と掲げるラグビーの強豪校でした。入部してからは、当然、「なんとなく」などと言っていられない泥臭い日々が始まりました。仲間たちと汗と泥にまみれながら必死にボールを追いかけ、在学中、日本一には届きませんでしたが、3 年間を通して、花園ベスト 4、16、8 という成績を経験することができました。そこから人生の歯車は自然とラグビーを中心に回り始めます。大学もラグビーの強豪校へと進み、高いレベルの中でチーム内外で一定の成績を残すことができました。社会人になってからも、ラグビーへの情熱は衰えず、仕事と競技を本気で両立できる企業を選んでプレーを続けました。高校、大学、社会人。振り返れば、私の青春と 20 代のすべては、常に楕円球と共にありました。始めたきっかけこそ誇れるものではありませんが、この長い競技生活の中で出会った多くの仲間たち、厳しくも温かく導いてくれた恩師、そして支えてくださったすべての関係者との出会いは、何物にも代えがたい私の人生の財産です。

ラグビーが教えてくれた「個の自立」とチームワーク

長年、ラグビーという過酷なスポーツに身を置いてきたことで、私の考え方や価値観、そして物事を考えるときの「軸」が形づくられました。よくラグビーを表す言葉として「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE」が使われます。とても美しい言葉ですが、実際にプレーしてきた私たちが感じるこの言葉の本質は、少しニュアンスが異なります。ラグビーは決して、甘えの許される集団競技ではありません。本質にあるのは、圧倒的な「個の自立」です。「隣の仲間がサボったから助けてあげる」とか、「できない人をカバーしてあげる」という、生半可な優しさのスポーツではないのです。まずは、一人ひとりがグラウンド上で自分の責任と役割を完璧に全うする。これが絶対の前提です。その上で、互いの覚悟や努力を肌で感じ取り、刺激を受け合う。信頼とリスペクトが

交錯した瞬間にはじめて、本当の意味でのチームワークが成立するのです。この「個が自立し、互いに刺激し合う」という考え方は、現在の私の立場において、組織運営の根底にある本質的なテーマとなっています。会社という組織もまた、一人ひとりのプロフェッショナルが自立し、自分の役割を全うすることで初めて強い力を発揮できるからです。しかし、同時に難しいのは、ラグビーで培ったこの熱い価値観を、そのまま今の社員たちに押し付けてしまっては組織がうまく機能しないということです。企業には多様なバックグラウンドや価値観を持った人々が集まります。だからこそ、ラグビーのスピリットという基本的な軸は胸に秘めつつも、言葉を選び、伝え方を工夫することが求められます。押し付けるのではなく、自然と誰もが力を発揮したくなるような、個が自立した強い組織をつくること。それを意識しながら、私は日々、経営という大きなゲームに向き合っています。

2027 年、オーストラリアで再びあの興奮を

今、私には大きな楽しみがあります。2027 年にオーストラリアで開催されるラグビーワールドカップに向けて、学生時代の友人と一緒に「現地観戦ツアー」に行く計画を立てているのです。2019 年の日本開催で体感した、あのスタジアム全体が震えるような熱狂と興奮。あの時の感動を、今度はオーストラリアの地でもう一度味わいたい。今からスケジュールを調整しながら、友人たちと作戦会議を開く時間は、大人の贅沢な趣味の時間そのものです。そして、このラグビー観戦という趣味を通して味わう「興奮」や「感動」は、そのまま私のビジネスにおける理想の組織像へと繋がっています。会社経営においても、あのスタジアムで味わった一体感を、大切な仲間である社員全員と共に分かち合うことができれば、これほど経営者として嬉しいことはありません。ひとつのベクトル、ひとつの高い目標に向かって、全員が納得して賛同し、全員で立ち向かっていく。そして、目標を達成できたときの大歓声のような喜びも、万が一届かなかったときの悔しさも、すべてを全員で共有できる組織を作っていきたいのです。誰ひとりとして取り残すことなく、仕事の結果に対して、社員みんなで一喜一憂を共有する。「今月はよかった」「次はもっとこうしよう」と、みんなで顔を見合わせて笑い合えることこそが、私にとっての「幸福」の追求に他なりません。そうした強い絆を持った組織をつくり上げることこそが、私の使命であり、人生をかけた目標です。私たちの理念である「幸福の追求と地球環境への貢献」の達成。それこそが、私がラグビーから学び、これから未来へと繋いでいくゴールなのです。